

『序曲』における山岳風景の意味

石原久子

本論文は、イギリスロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスの『序曲』に描写された山岳風景の意味を考察するものである。大自然の中でのワーズワスの諸体験の特徴は、大自然による人間の精神へ働きかけと、それに呼応する人間精神からの想像力／創造力の働きという、相互の交感体験である。ワーズワスの少年時代の山体験は、子供らしい遊びを通して、大自然との交感体験の下地を積み重ねてきた。山が示す美しい姿に魅了されただけでなく、山の恐ろしい姿も精神の成長に大きく寄与した点が注目される。青年時代の山体験は、実際の登山体験によって直接目にした崇高美の眺望により、精神の成長・発達に頂点に達した点が注目される。ワーズワスはそのときの山の風景を、精神の働き様が具現化されていると解釈した。大自然と精神との交感体験の究極の形という意味において、啓示的な体験であり、非常に意義深い体験であった。従って、『序曲』における諸体験の描写の中でも、山体験は重要な位置を占めるのである。

1. 序

山はどうして人を魅了してやまないのだろうか。すぐそばで仰ぎ見る迫力ある近景、遠くから眺める雄大な遠景、四季折々に移ろいゆく風景、一日のうちでも移ろいゆく風景、実際に登山をして体験するすがすがしさや満足感や達成感、山頂からしか見られない息をのむ眺望など、魅力は尽きない。

詩人や作家もこぞって山を作品に描いてきた。山は様々なシンボルとして登場する。『イメージシンボル事典』で「山」を調べると、1ページ半にわたって記述があり、意味は実に多岐にわたる。¹

山に魅了され、大自然に魅了され、山を始めとする大自然が自身の詩心の成長・発達に大きな役割を果たした、一人のイギリスロマン派詩人がいる。ウィリアム・ワーズワスである。彼の代表作の一つである『序曲』は詩人としての前半生を省察した作品であり、子供時代から青年時代までの様々な体験を述べてその意義を考察して、詩人としての精神の成長の軌跡をたどった作品である。本論文では、『序曲』に描写された山の記述に特に注目して考察することにより、ワーズワスに山が与えた影響について論考するものである。

1. アト・ド・フリース著、山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』（大修館書店、1984年）441-442.

2. 子供時代の山体験

ワーズワスが子供時代をすごした場所はイングランドの湖水地方である。険しい山岳地帯ではないが、丘陵や森林や湖といった大自然に恵まれた場所であった。この頃のワーズワスは子供らしい遊びを通して、大自然が自身の精神に与える影響を徐々に体得していったのである。

8歳のときの出来事である。星が頭上で輝く夜、ヤマシギを捕らえようとして、肩に背負えるだけたくさんの罌を背負い込んで山に分け入ったことがあった。時々、激しい欲望にかられて、仲間がしかけた罌から獲物をつい奪ってしまったことがあった。その時である。周囲の大自然が異様な様相を示したように見えたのである。

…when the deed was done
I heard among the solitary hills
Low breathings coming after me, and sounds
Of undistinguishable motion, steps
Almost as silent as the turf they trod. (I : 328-32)²

また、人気のない高い峰の上で、四方を山に囲まれた中で、親鳥が巣をつくるころならどこでも、その巣から雛の卵を略奪したこともあった。その結果として、大自然の恐怖を体験することになる。

…at that time
While on the perilous ridge I hung alone,
With what strange utterance did the loud dry wind
Blow through my ears; the sky seemed not a sky
Of earth, and with what motion moved the clouds! (I : 346-50)

山を舞台にしたこれらの体験は、今まで慣れ親しんでいた自然風景が今までとは異なる姿を示しただけでなく、超自然的な形相に感じられ、この上なく不安な気持ちにさいなまれた経験である。ボート盗みのエピソードも同様である。この場合は、舞台は山々に囲まれた湖であるが、日没後の遅い時間帯、一人っきりという孤独な状況、ボートの所有者の許可を得

2. William Wordsworth, *The Prelude, The Prelude: 1799, 1805, 1850* ed. Jonathan Wordsworth, M.H.Abrams, and Stephen Gill (New York: Norton, 1979). 本論文における「序曲」からの引用は全てこのテキストに拠る。また、1805年版テキストを用いる。

ずに勝手にボートを使って漕ぎ出したという良心の呵責という要素が複雑に絡み合って、始めこそは意気揚々とボートを漕いでいたものの、次第に周囲の崖が異様な姿で迫ってくるように思われたのである。

…from behind that craggy steep, till then
 The bound of the horizon, a huge cliff,
 As if with voluntary power instinct,
 Upreared its head. I struck, and struck again
 And, growing still in stature, the huge cliff
 Rose up between me and the stars, and still
 With measured motion, like a living thing
 Strode after me. (I : 405-12)

これら3つの体験は、大自然の中での恐怖体験である。このような怖い体験はトラウマとなって、本人に悪影響を及ぼすことがよくある。しかし、ワーズワスの場合は違う。むしろ、好ましい影響を与えたのだ。換言すると、ただ怖い体験をしたということだけで終わるのではなく、その恐怖体験がワーズワスの精神の成長・発達に寄与したという点が、特に注目を引く。ヘイヴンズは、『序曲』が他の自叙伝とは異なる所以を次のように指摘している。

Of the forces which Wordsworth felt contributed not a little to his development one is rarely mentioned, except unfavorably, in other autobiographies and is nowhere else given the emphasis which it receives in *The Prelude*. This is the ministry of fear.³

『序曲』執筆時にワーズワス自身、子供の頃のこれらの体験に際して大自然が自分の精神に与えた影響力を振り返って、感謝の念を綴っているのだ。

…all
 The thoughts and feelings which have been infused
 Into my mind, should ever have made up
 The calm existence that is mine when I
 Am worthy of myself. (I : 357-61)

3. Raymond Dexter Havens, *The Mind of A Poet* 2 vols. (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1940) I: 39.

「本来の自分自身の姿」に立ち返らせてくれる力を与えてくれた、大自然の愛情溢れるお導きに対する感謝の気持ちを読み取ることができる。

上記の3つのエピソードは、いわゆる一連の「時の諸点」エピソードに含まれるものである。「時の諸点」とは、後年になって振り返った時に、精神の滋養となって活力を与えてくれる過去の貴い体験のことを指し、ワーズワスは次のように記している。

There are in our existence spots of time,
Which with distinct preeminence retain
A renovating virtue, whence, depressed
By false opinion and contentious thought,
Or aught of heavier or more deadly weight
In trivial occupations and the round
Of ordinary intercourse, our minds
Are nourished and invisibly repaired.... (XI: 257-64)

たとえどんなに憂鬱な状況下でも、過去の体験を回想するだけで、精神を高揚させ救いあげてくれる力を持つ貴い体験が、ワーズワスの少年時代の山体験なのである。「時の諸点」とはワーズワスの造語であるが、ハートマンはこの言葉を分析して、“spot”は大自然の中のある特定の場所を意味すると同時に時間軸の固定された点を意味し、これらの諸点は時間の中に存在するにとどまらず、時間を創造すると指摘する。そして、「時の諸点」というこの概念は“very rich, fusing not only time and places but also stasis and continuity”⁴と結論づける。ブルームも同様に、『序曲』におけるこの概念の意義深さを強調して、次のように述べている。

The Prelude is ... an autobiographical myth-making. Dominating *The Prelude* is the natural miracle of memory as an instrumentality by which the self is saved. Supreme among Wordsworth's inventions is the myth of renovating “spots of time,” ... the entire basis for the imaginative energy of *The Prelude*.⁵

この指摘は正鵠を射ている。『序曲』全体を通して読むと、少年時代の山体験に限らず、ワーズワスが大自然の中で経験する全ての体験が「時の諸点」となり得ることがわかる。本論文

4. Geoffrey H. Hartman, *Wordsworth's Poetry, 1787-1814* (New Haven: Yale UP, 1964; Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1987) 212.

5. Harold Bloom, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry* (Ithaca, New York: Cornell UP, rev. ed. 1971) 143.

では山に関する記述しか扱わないが、山体験は重要な「時の諸点」体験である。山での恐怖体験が精神の成長・発達に大きく寄与したことは、いくら重要視してもしすぎることはないが、山の美がワーズワスの精神に与えた影響ももちろん重要で、見逃すことはできない。

...that I had seen him[the sun] lay
 His beauty on the morning hills, had seen
 The western mountain touch his setting orb
 In many a thoughtless hour, when from excess
 Of happiness my blood appeared to flow
 With its own pleasure.... (II: 188-93)

このパッセージの重点は太陽の光の美しさにあるのだが、日の出のときでも日没のときでも、太陽の円弧が山の稜線と触れ合う瞬間の美に強烈に感動して幸福感を感じたという点に、太陽と山が絶妙な調和を遂げる瞬間に生じる魅力を受容するワーズワスの鋭い審美眼を確認できよう。このような絶景を見て、ワーズワスの精神が反応する。

A plastic power
 Abode with me, a forming hand, at times
 Rebellious, acting in a devious mood,
 A local spirit of its own, at war
 With general tendency, but for the most
 Subservient strictly to the external things
 With which it communed. (II: 381-87)

「ある形成力」が内部精神から出されて大自然と親密な交わりををすると言う。この形成力とは精神の能動的な働き、すなわち、想像力／創造力を指す。精神は大自然の様相の魅力を感じ覚器官を通して受容するだけでなく、想像力／創造力を駆使して精神から大自然へ能動的に働きかけるという、2つの働きをする。大自然と人間精神とのこのような交感体験は、ワーズワス独特なものである。批評家たちは、ワーズワスと大自然とのこの交感体験を重要視して、その本質を言い表すのに、各自が自分なりの呼び方を考案している。例えば、ハートマンは“interaction of nature and mind”⁶、ヘイヴンズは“wedding of the mind to nature by the imagination”⁷、ブルームは“reciprocity between the external world and his

6. Hartman, 219.

7. Havens, I: 4.

own mind”⁸、エイブラムスは“joint effort of inner and outer, mind and object, passion and perceptions of sense”⁹と表現している。これらの言葉は、大自然と人間の内部精神とがお互いに好作用を及ぼし合うことを示しているだけでなく、その結果として、大自然と人間精神の双方が高次元の様態へと昇華されることを、ニュアンスとして含んでいる。少年のワーズワスにとって、山の風景美との出会いの体験は、自身の精神の成長・発達における重要な一要素であり一過程である。

3. 青年時代の山体験

『序曲』にはワーズワスの青年時代の2回の登山経験が描写されている。時期がそれほど離れていないこれらの経験は、ヨーロッパ大陸のアルプス登山と、イングランドのスノウドン山の登頂体験である。『序曲』という作品は自叙伝という形式を借りてはいるが、語られる体験の順序は必ずしも時間の経過に沿っているわけではない。しかし、これら2つの登山体験は、全13巻からなるこの作品の、中間の第6巻と最終巻の第13巻に意図的に配置された。このような構成上の配慮からも、これらの体験がワーズワスにとって非常に重要で、啓示的な意味合いをもつものであることが伺える。

ワーズワスはアルプス登山で、山頂からの眺めを楽しみにして徒歩を続けていたのだが、知らないうちに峠を越えてしまっていたことに気づかされて、期待はずれゆえに落胆する。しかし、その直後に見た山岳風景は実に印象深いものであった。

The immeasurable height
Of woods decaying, never to be decayed,
The stationary blasts of waterfalls,
And everywhere along the hollow rent
Winds thwarting winds, bewildered and forlorn,
The torrents shooting from the clear blue sky,
The rocks that muttered close upon our ears—
Black drizzling crags that spake by the wayside
As if a voice were in them—the sick sight
And giddy prospect of the raving stream,
The unfettered clouds and region of the heavens,

8. Bloom, 132.

9. M.H.Abrams, *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition* (New York: Oxford UP, 1953) 51.

Tumult and peace, the darkness and light.... (VI: 556-67)

天をつくほどに高く聳える樹木、岩の裂け目に吹き溜まった風、ごつごつとした岩山、轟き落ちる滝、勢いよく流れる溪流という具合に、個々の構成要素のインパクトが強いことに加えて、それら暗い地上のどよめきと対照的な清らかな天空といった情景全体は、畏敬の念を呼び起こすような驚嘆すべき荘厳で崇高な情景である。崇高という概念は哲学に由来するものであり、それにはエドモンド・バークの代表的著作の一つである『崇高と美の観念の起源』（1757年）が世間に与えた影響は大きい。哲学の域を越えて文学や絵画などの芸術の分野にも、崇高という概念は浸透した。ワーズワスを始めとするロマン派詩人たちはこぞって山の壮麗さや崇高さを賞賛してうたいあげ、アルプス詣でが大流行した。ニコルソンは、イギリス国民による山に対する趣味の変化—17世紀における不快・嫌悪感からロマン派詩人における山の賛美・崇敬へという劇的転換—の経緯を論述した著書の中で、ワーズワスと山との相関性を次のように指摘している。

他のいずれの詩人にも増してワーズワスは、無限性と永遠性の伝統の重みを認識していたが、山々は彼の生涯を一貫して、それらの概念の偉大な例証となった。¹⁰

脳裏に焼きついて離れないインパクトの強いこの崇高な風景を、ワーズワスは次のように解釈している。

...all like workings of one mind, the features
Of the same face, blossoms upon one tree,
Characters of the great apocalypse,
The types and symbols of eternity,
Of first, and last, and midst, and without end. (VI: 568-72)

個々の事物が圧倒的な存在感を主張していながらも、それでも全体が調和して統一されていると感じ、「これら一切が一個の精神の作用のようであり」、「永遠なるものの典型であり象徴である」と記述されている。すなわち、この風景が自分自身の精神そのものを表している、心象風景のように思えたのである。この解釈はワーズワスの精神の成長・発達の過程を理解する上で重要である。彼は幼少時代から大自然と自分の精神との交感体験を重ねることにより、精神を発達させてきたのであり、アルプスでの体験も大自然と自身の精神との交感体験の一つである。この時、目の前の風景が自分の精神の働き様を実際に具現化していると感じ

10. M. H. ニコルソン著、小黒和子訳『暗い山と栄光の山』（国書刊行会、1989年、原書初版1959年）466-7.

たということは、精神の能動的な働きである想像力／創造力の働きの力強さと偉大さを実感したことになる。大自然の営みと匹敵するほどの人間精神の働きの力強さと偉大さを、眼前にとらえて実感したことになるので、アルプスのこの山岳風景は非常に意義深い。

一方、スノウドン登頂体験であるが、日の出を拝む目的で山頂を目指し、濃霧の中を黙々と登っていったときのことである。気象条件の悪さゆえに御来光を拝むには至らなかったが、それを補って余りある風景を目にした。長い引用文になるが、重要な箇所なので、ワーズワスの詩句全文を書くことにする。

When at my feet the ground appeared to brighten,
And with a step or two seemed brighter still;
Nor had I time to ask the cause of this,
For instantly a light upon the turf
Fell like a flash. I looked about, and lo,
The moon stood naked in the heavens at height
Immense above my head, and on the shore
I found myself of a huge sea of mist,
Which meek and silent rested at my feet.
A hundred hills their dusky backs upheaved
All over this still ocean, and beyond,
Far, far beyond, the vapours shot themselves
In headlands, tongues, and promontory shapes,
Into the sea, the real sea, that seemed
To dwindle and give up its majesty,
Usurped upon as far as sight could reach.
Meanwhile, the moon looked down upon this shew
In single glory, and we stood, the mist
Touching our very feet; and from the shore
At distance not the third part of a mile
Was a blue chasm, a fracture in the vapour,
A deep and gloomy breathing-place, through which
Mounted the roar of waters, torrents, streams
Innumerable, roaring with one voice. (XIII: 36-59)

天空に高々と昇り凜として輝く月から一条の光が閃光のように射し、ワーズワスは霧の海の岸辺に立っていることに気づく。この幻想的な状況下で目に入ったものは、灰色の霧の中

に点々と黒々とした背をもたげ上げる峰々、本物の海のお株を奪うほどに突き進む霧の海の波動、霧の海の中にできた一本の暗黒の深淵、その深淵から聞こえてくる無数の流れの轟きであった。明暗や静と動の対比も印象的であるこの風景は、やはり崇高美の風景である。個々の事物が存在感を持ちながらも全体が統一されていて、畏怖の念を感じさせて驚嘆に値する情景である。注目したいのは、霧の海の中にできた紺青の亀裂である。その亀裂の深淵から無数の音が立ち昇ってくるのが聞こえるのだが、ワーズワスは次のように解釈している。

...in that breach
Through which the homeless voice of waters rose,
That dark deep thoroughfare, had Nature lodged
The soul, the imagination of the whole. (XIII: 62-5)

満面の霧の海にたった一つある紺青の裂け目の奥底にこそ想像力が宿っている場所だという認識は、詩人としての自分自身の存在意義に関わる重要な認識である。アルプスの山岳風景と同様に、ここでも、自身の精神の働き様が具現化されている風景を見たのである。無数の流れの轟き音が上昇気流に乗って霧の抜け穴を昇ってくるにつれて、一つの音に統合されて天空へと響いているということは、混沌をも統合して永遠へと導く機能を想像力が持つことを意味し、その機能が実演される様をワーズワスは体感したのである。更にワーズワスは、この風景は“perfect image of a mighty mind” (XIII: 69) であると言う。大自然の風景が精神の完璧な象徴だと感じたということは、精神の働きが大自然の営みに匹敵し得るという確固たる証拠を認識したのである。

このように、アルプス登山体験とスノウドン登山体験は類似しているが、微妙な相違点もある。ハートマンが指摘するように、アルプス登山の場合は、大自然と想像力は見分けがつかないほどに混じり合った状態でワーズワスを導いたが、スノウドン登山の時は、想像力をそれ自体で感得してそれを大自然と重ね合わせた。¹¹ 換言すると、想像力の自立性の程度に差があることになる。しかしながらどちらの場合も、想像力の萌芽と発達の集大成としての山岳風景であることにはいささかの疑問の余地がなく、重要度に差がある訳ではない。啓示的風景として、他では得難い貴重な体験であったのである。

4. 結

以上、『序曲』における山に関するパッセージを検討してきた。大自然と人間精神との相互作用による交感体験を積み重ねることによって想像力／創造力を発達させていくのがワー

11. Hartman, 48; 254.

ズワスの特徴であるが、子供時代の山体験は、精神に刺激を与えて覚醒させ、後の成長・発達の下地をつくった。青年時代の山体験は、精神の働きの集大成を実感する啓示的な山岳風景を見ることになった。子供時代の体験があったからこそ、青年時代の体験が一層意義深くなる。大自然に対する鋭敏な感受性と審美眼を持ち合わせている人だけが、最終的に到達できる境地である。ワーズワスにとって山岳風景は、詩人としての自分の存在意義を確認する実り多い機会となったのである。

最後に、もう一つ、山に関するパッセージを引用しよう。

By influence habitual to the mind
The mountain's outline and its steady form
Gives a pure grandeur, and its presence shapes
The measure and the prospect of the soul
To majesty: such virtue have the forms
Perennial of the ancient hills—nor less
The changeful language of their countenances
Gives movement to the thoughts, and multitude,
With order and relation. (VI: 722-30)

山のイメージが自己の精神に及ぼす影響を述べたこのパッセージに示されているように、山は憧れ見入るワーズワスの心の尺度を広げ、偉大さを授ける。山を眺めることだけでも得られるものは多いが、それでは、アルプス登山とスノウドン登山のように、実際に山に登ることは何が違うのだろうか。実際に山に登ると、山が示す多様な表情（“changeful language of their countenances”）を直接に読み取り、それによって、大自然とのより強い一体感を感じ、より密度の濃い交感体験をし、より深い歓喜を得ることができる。そのときの風景が、精神の働き様を具現化した風景であったことにより、ワーズワスの感嘆も一段と大きなものであったと推測できる。これら2つの近距離で見た山岳風景は、大自然と人間精神との交感体験の究極の形として、『序曲』という作品の中でも特に重要な位置を占めているのである。